
海賊のサーヴァント

鹿本太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊のサーヴァント

【Nコード】

N7129H

【作者名】

鹿本太一

【あらすじ】

Fate/staynightの聖杯戦争にあの男がサーヴァントとして参加！果たしてどうなる？

第1話（前書き）

素人です。頑張って書きました！ヨロシクお願いします！

第1話

ここは英霊の座である。

そして、今ここに新たな英霊となる英雄がやって来た。

「ん？ドコだここ？みんなどこ行っただ？」

その英雄は海賊モンキー・D・ルフィである。そこでルフィはある事に気付く。

「帽子！！帽子がねえ！！どこいった帽子？」

そう、ルフィの宝物である麦藁帽子がなかったのだ！

「帽子ー、どこだよ帽子」

ルフィがオロオロしながら帽子を探していると急にルフィを取り巻く闇から声がした。

「よく来たな海賊の英雄よ。ここは英霊の座である」

「うわっ！！何だ？どこから声がしたぞ！？とゆうかオッサン誰だ？」

ルフィは少し驚きながらもすぐにいつも通りに戻り闇に聞いた。

「私はこの英霊の座の主のような者だ」

「ふーん！英霊の座って何だ？」

「英霊の座とは生前に偉業を成し遂げた者が死後に世界と契約し英霊となった者を招き入れる場所だ！つまりお前は死んで英霊になる事を許されたのだ！！」

この解答を聞いたルフィは戸惑っていた。

「え、つまり俺はもう死んでんのか？」

「そつだ」

素直に肯定されてルフィはかなりのショックを受けた。

「ええええええ！！！！俺は死んだのか！仲間！仲間はとうなつたんだ??」

「それは言えない事だ！だが、ただ一つだけ言える事がある！！」
「それは何だ？」

「それは……」
ルフィは唾をゴクリと飲み込む。

「それはお前が仲間と共に海賊王になったという事だ！言っただろ？ここは生前偉業を成し遂げた者だけが来る事ができるのだと」

それを聞いたルフィはさらにショックを受けたがすぐに喜びに変わった。

「俺は海賊王になったのか?!やった……!!俺は海賊王になったんだ！シシ海賊王になって死んだのなら悔いはねえや！あいつらも元気かな？」

しかしすぐに疑問が浮かぶ

「あれ？俺はどうやって海賊王になってどうやって死んだんだ？全然覚えてねえや！」

「どうやらお前は記憶が一部欠如してるようだな」

だがルフィはすぐに開き直り言った。

「まあいつか思い出すだろうからいいや！オッサン俺はこれからどうなるんだ？」

「お前はこれから英霊になるかならないか選択できる。英霊になればサーヴァントとなって何でも願いが叶う『聖杯』を手に入れるチャンスを得られるのだ！」それを聞いたルフィは目を輝かせた。

「ウヒョ……！！その『聖杯』ってお宝を手に入れば何でも願いが叶うのか？」

「そうだ」

「なる！俺は英霊になる！！そして死ぬ程飯を喰う！」（ドーン）
ルフィは胸を張って答えた！！

「よかるう。ならばこの光の先へ進め！」

すると突然ルフィの前に光が現れた。ルフィは光に向かって歩き出したが途中で立ち止まって質問した。

「そういえばオッサン！俺の帽子知らねえか？？あれ俺の宝物なんだよ」

「お前の宝物はその光の先ですぐに見つかる。後お前はその光の先で少しイレギュラーな存在だが気にせず『聖杯』を求めよ」

「そうか！すぐに見つかるのか！！シシシありがとなオッサン」

そしてルフィは笑顔で光の先へまた歩き出した。

第2話 召喚（前書き）

感想書いてくれてアリガトございます。なんとか完結できるよう頑張ります！

第2話 召喚

ここは冬木市深山町にある小さな公園。

辺りは二月で夜ということもあり人が一人もいない、時々ブランコが風に吹かれてギシギシ音を鳴らし揺れていた。

そんな静まりかえった空気の中、公園の中心に一筋の光が地面に差し込んだ。光は徐々に円の形になっていき文字が書かれ一つの魔術式ができ上がった。でき上がった魔術式は強く光りだしその中心にルフィの姿が現れた。

「ん？着いたのか！？あ、そうだ！帽子どこかな帽子ー」ルフィは特に辺りを気にするわけでもなくさっそく帽子を探し始めた。

ぐると公園を見渡すと砂場、すべり台、シーソーとどこにでもある普通の公園で麦藁帽子のような物は見当たらなかった。

「なんだよ！帽子見つからねえじゃんかよ！さてはあのオッサン嘘ついたのか！？」

ルフィが一人、静かな公園の中でブツブツ文句を言いながら帽子を探していると急にルフィの背後で気配がした。

気配がした方向を見るとブランコの上で公園の電灯の明かりと共に二つの光がこちらを向いているのが目に入った。光に目を凝らすとブランコの上に一匹の黒猫がジッとルフィを見つめながら座っていた。

「何だ！ただの猫か！おい、お前俺の帽子知らねえか？」

ルフィが尋ねながら黒猫に近付くと、黒猫がある物を被っているのに気が付いた。黒猫が被っていた物はルフィが自分の命より大切にしていた麦藁帽子であつた！！

「あー！俺の帽子！！お前がみつけてくれたのか？」

そう言いながらルフィは黒猫を抱き上げて帽子を黒猫の頭から外し自分の頭に被せた。

「アリガトなお前！これ俺の宝物なんだよ！いやー見つかつてよかった！！ん？お前頭に変な模様がついてんぞ！？」

ルフィが黒猫から帽子を外すと、黒猫の額には不思議な模様が刻まれていた。

「まあいいか」

ルフィはそれ以上気にすることもなく黒猫をブランコに戻し、自分も隣のブランコに腰掛けた。

公園にはルフィと黒猫しか存在せずルフィが一人でブランコで騒ぐ音以外、静寂に包まれていた。

「ハハハ！面白れえなブランコ！！あれ？そういえば俺、何しに来たんだっけ？」

ブランコで遊ぶのを止め、下を向いて考え込んだ。「ん？何だったかな、確か何かを手に入れるために来たんだよな？あーそうだ！『聖杯』ってのを探せばいいんだっただな！！」

ポンと手を叩きスッキリした顔になったが、またすぐに考え出した。

「でもどこに行けば聖杯があるんだ？なあお前、聖杯がどこにあるか知らねえか？」

ルフィは腕組みして考えながら隣のブランコの上に寝そべっている黒猫に聞いた。すると黒猫はゆっくりと起き上がり大きく伸びをしてヒョイツとブランコから跳び下りた。そしてペタペタと歩き出し公園の入口まで歩いたら立ち止まり、振り返りルフィをジッと見つめて

「ニャー」と一度だけ鳴き、また歩き出した。

「お！なんだ！！聖杯まで案内してくれんのか？！お前いい奴だなあ」

ルフィはそう言うつとブランコから立ち上がり、笑顔で黒猫の後を追って歩き出した。

そして冬木市の静かな夜の中を一人の海賊と一匹の黒猫は歩き、しばらくすると夜の闇に溶け込んで見えなくなった。

第3話 出会い（前書き）

感想や意見ありがとうございます！長文を書くのは苦手ですが頑張
って書きたいです！

第3話 出会い

月明かりによって冬木市の道路に浮かぶ二つの影。一つは聖杯を求めるサーヴァントとしてこの地に召喚された海賊モンキー・D・ルフィ、そしてもう一つはルフィが召喚された公園で出会った額に不思議な模様がある謎の黒猫。

ルフィは今、その黒猫が聖杯まで案内してくれると思い込んでおり、黒猫の数メートル後ろを歩いている。

だが、ただ歩くだけなのはつまんないらしく道端にあった小石を蹴って鼻歌を歌いながら進んでいた。

「おーい！あとどんくらい歩けばいいんだ？」

ルフィは時折黒猫に問いかけるが黒猫は何も答えずただ前を見て歩くばかりである。

「あいつ聞こえてんのかな？俺そろそろ腹減ってきたんだけど！」

ルフィがそう言った時である、ルフィが公園から蹴り続けてきた小石が道路の端にある側溝に落ちてしまった！

「あー！俺の石！！おい石！大丈夫か！？」

ルフィは懸命に側溝に向かって石と叫ぶが石が側溝から出て来ることはなかった。ルフィはガクリと肩を落とし前を歩く黒猫を見てから空を仰ぎ見た。

夜空には星がまんべんなくばらまかれており、その中心には満月が

ドカンと浮いていた。

「月って饅頭みたいでうまそうだなあ」

ルフィが月に向かって馬鹿な発言をしていた時である。

「!!!何だありや!?!」

夜空に浮かぶ満月に一つの影が現れた！影はそのままルフィの上を通過し二十メートルぐらい後ろに着地した。ルフィが後ろを振り向くとそこには青を基調とした戦闘服に身を包み、手には真紅の槍を持った男が立つてこちらを睨んでいた。男は殺気を含んだ声でルフィに問いかける。

「おい！ テメエは何者だ？」

「俺か?!俺はモンキー・D・ルフィ!!!海賊王になった男だ!!!」
(ドーン)

ルフィは殺気に動じることもなく堂々と答えた。しかし、この答えを聞いた男は片眉をつり上げる。

「海賊王？なんだそれは？テムエは海賊なのか？」

「ああ海賊だ！！ところでお前、聖杯ってどこにあるか知らねえか？」

「！！！！お前聖杯の事を知っているのか？！」

「ああ！何か英霊の座つて所で聖杯は何でも願いが叶うお宝つて聞いたんだけどよ、それ以外サツパリ分かんねえんだよ！！」

それを聞いた男は少し考え込む。（英霊の座つてことはこいつサーヴァントか?! しかもそんな名前の海賊聞いたことねえぞ! 何より

コイツ、聖杯の事だけ知っていて聖杯戦争の事はまったく知らねえ
ってどういうことだ！)

「おーい！！お前聞いてんのか？！聖杯はどこにあんだよ？」

男が一人で考え込むのを見てルフィは不思議に思い男に問いかけた。

「ああすまねえ、少し考えてた！聖杯がどこにあるのかは分からねえが聖杯を手に行けるのは一人だけだって事は教えといてやるよ」

「分かった！ありがとな！！」

ルフィは笑顔でお礼を言っ立去ろうとすると男がルフィに呼びかけた。

「おい麦藁！！」

「ん？何だ？」

「お前は聖杯を手に入れたいのか？！！」

「ああ！そうだ！！」

ルフィがそう返事をする男は口角を上げた。

「そうか。おい麦藁！実は俺も聖杯が欲しくてこの世界に来たんだ！！で、邪魔だからお前を殺すって言ったらよお前どうするよ？」

「ああ！別にいいぞ殺しに来ても！！その時はお前をぶっ飛ばせば

いいだけだろ?! 簡単じゃねえか!」

ルフィはまるでそれが当たり前であるかの様に答えた。ルフィの反応を見た男は一瞬あっ気にとられたような顔をしたがすぐに笑い出した。

「クハハハハハ!! いいねえお前! 面白れえ、気に入ったぜ!! 今すぐにでも戦いたいとこだが、あいにくマスターに呼ばれててよ! おい麦藁! 俺の名はランサー!! そして真名もお前が名乗ったからには俺も教えてやる! 俺の真名はクーパー・リンだ!! よく覚えておけ!」

「わかった! ランナーでクーパー・リンだな!! よく覚えておく!」

「違えよ! ランナーじゃなくてランサーだ!! なんて簡単な方間違えてんだよ」

ランサーは少々怒りながらも陽気な声でルフィに言った。

「じゃあな麦藁! 次会った時は楽しく殺し合おうぜ」

「ランサーか!! よし! バツチり覚えたぞ! じゃあまたなランナー!」

「おい!! 全然覚えてねえじゃねえか! ランサーだランサー。ったく、次会う時までになちゃんと覚えとけよ」

そう言っつてランサーはルフィの前から風のように走り去って行った。

「うわー! すごい足速いなあいつ。よし! 俺も頑張つて聖杯探すか」

そう言つてルフイは気合いを入れ直すと黒猫の方を振り返った。するとそこに……黒猫は……いなかった…。

「え……！あいつどこ行つたあの黒猫？！おい、どこだーあいつ……！」

ルフイは必死に呼びかけるが何の返事もない。

「ちきしょー！あのランナーって奴のせいで見失つちまつたじゃねえか……！」

ルフイはあまり非のないランサーに怒りながらも一人で歩き出した。

「まーいいや！たぶんこつちに聖杯がある気がする」

そう言つてルフイは自分の勘を頼りに進んで行つた。

しばらく歩くと塀に囲まれた大きな和風の屋敷が現れた。ルフイここである事を思い付く。

「でっけえ家だなあ！そうだ……！今日はこの家に泊めてもらおう！」

そう言つてこの屋敷の玄関を探す。そして玄関を探すため塀の角を曲がった。

角を曲がった先には玄関がありその前には三人の人影があつた！

影のうちの一人は黒いツインテールの少女、二人目は赤茶色の髪をした少年、そして最後の一人は甲冑に身を包んだ金髪の少女であつ

た。三人は何か話し込んでいる様子でルフィはそれを角を曲がった所で見ていた。しかし、三人が話し終えるのを待ちきれず声をかけた。

「おーい！！お前らこの家の人か？」

「！！！！」

三人は声でルフィの存在に気付いたらしく少しビクリした表情をしたが、すぐに金髪の少女がルフィに突っ込んで来た。

「ハアアアア！」

少女はルフィの少し前でジャンプをし掛け声と共に上から武器を振り下ろした。

「うわっっ！！！！何すんだお前！」

ルフィは間一髪のとこで避けた。避けた時に武器が服をかすめたので服が少し切れている。

「「な！！！！」」

切りかかった少女と黒いツインテールの少女は驚愕した。それもそのはずこの金髪の少女はサーヴァント中最強のクラスであり、その手に持つ武器は風王結界によって刀身が見えない不可視の剣。常人にこの一撃を避けられるはずがないのだ。

「貴方は何者だ！」

金髪の少女はルフィをキッと睨みつけて問いかける。

「俺はモンキー・D・ルフィ！海賊王になった男だ！！」（ドーン）
ルフィはランサーの時と同様に答えると三人もランサーと同じ反応をする。

（海賊王？なんですかそれは？聞いたこともありません！）

（海賊王？何よそれ？てゆうかあいつあの格好で寒くないのかしら？！）

（なんでさ？）

三人がそれぞれの疑問を持って悩んでいる中ルフィは言った。

「なあ！お前らこの家の人か？俺今日この家に泊まりたいんだけど！！」

すると赤茶色の髪をした少年が答えた。

「ああ！泊まる所がないんだったら家に泊まっていけばいいよ！」

この発言にすぐに金髪の少女は反対した。

「シロウ！！いけません！敵か味方かも分からないのですよ！！」

「大丈夫だよセイバー！この人はきっと悪い人じゃない！！」

この答えを聞いたセイバーは納得いかなかったのだろう下を向き、逆にルフィはこの日一番の笑顔になって言った。

「いいのか？！お前いい奴だなあ、俺の仲間にならないか？」

「…え！俺はいいよ」

「えー！いいじゃんか！仲間になってくれよ！」

ルフィと士郎と呼ばれた少年が楽しそうに喋っていると、ツインテールの少女が口を開いた。

「ねえ衛宮君！とりあえず家に入らない？」

「ああ！そうだな遠坂！！みんな家に入ってくれ！」
こうして四人は士郎の家に入っていた。

第4話 規格外なヤツ（前書き）

更新遅れましたー。あと第三話でランサーの真名間違えてしまってますいせんでした。これから頑張ります。

第4話 規格外なヤツ

衛宮家に入った四人は居間に集まっていた。

「とりあえず自己紹介かな。俺の名前は衛宮士郎！よろしくな、ルフィー！」

「…遠坂凜よ」

「……………セイバー…です」

「士郎に凜にセイバーだな！よろしくな！！」

士郎は笑顔で自己紹介するも、凜は少し警戒した様子でセイバーに至っては敵意むき出しでルフィを睨みつけている。しかし、そんなセイバーの視線を特に気にするようすもなくルフィはニカッと笑って返事を返す。「それじゃあ、話しを始めるけどいいわね？」

自己紹介を終えた所で凜が士郎に話し掛けた。士郎はコクンと頷きセイバーも凜の話に耳を傾けている。ルフィは先程凜が修復した窓ガラスをぺたぺた触って騒いだり、畳に寝そべってゴロゴロしている。

「率直に言っわね、衛宮君あなたはマスターに選ばれたの！どっちかの手に聖痕があるはず、それは令呪といってマスターとしての証よ」

「どっちかの手って……………ああ、これの事か」士郎は自分の手に刻まれた令呪を見つめる。

「そう、それが令呪よ！それがあると自分のサーヴァントに命令することが出来るわ。でも気を付けてね、三回令呪を使うと令呪は消えてあなたは殺されてしまうから！」

「えー！俺が……殺される？」

士郎が驚いた表情をする。

「ええ、そうよ。マスターが他の六人のマスターを倒すのが聖杯戦争の基本よ！そして一人残らず他のマスターを倒したマスターだけが望みが叶う聖杯を手に入れることができる」

「は……？え……何？」

凜が人差し指を上げて説明するが士郎はまったく理解できていない。

「まだ理解できない？衛宮君、あなたは巻き込まれたのよ！七人のマスターがそれぞれのサーヴァントと協力して他のマスターを倒す聖杯戦争っていう魔術師同士の殺し合いにね！」

「な……何言っただよ遠坂！そんな話ある訳ないだろ」

士郎はかなり動揺しながら凜に言った。

「気持ちは解るけど、あなただって本当はもう理解してるはずよ？衛宮君、あなたは一度サーヴァントに殺されてまた殺されそうになった時セイバーを召喚した。もう自分が逃げられない立場なんだってことを」

凜のこの言葉に士郎は深々と考えだし、どこか納得ような顔で凜をみる。この様子を見た凜は一息ついてまた口を開いた。

「納得した？それならこの話は一旦終わるわね。問題はここからよ！」

そう言う凜は鋭い視線をルフィに向けた。

「ルフィ！！あんた一体何者よ！セイバーの攻撃を避けるなんて普通の人間にできるはずないわ！」

凜の言葉にセイバーも頷いている。ルフィは寝そべっていた体を起こして言った。

「俺もそのサーヴァント？ってヤツで聖杯を探してた！！」

ルフィがそう言う凜とセイバーは目を見開いた。

「ちょっと待って！あんたサーヴァントだったの？！…でも、そんなことありえないわ！聖杯戦争で召喚されるサーヴァントの数は七体、今回はセイバーで最後だったはずよ！！」

凜がそう言う凜とセイバーもそれに続いた。

「サーヴァントは他のサーヴァントが近くにいると気付くものです。しかし貴方からはサーヴァントの気配を感じられない。それに魔力も微かに感じる程度で貴方がサーヴァントとは思えません」

凜とセイバーに言われルフィも少し困った顔をする。

「そんなこと言われてもよ、俺難しい事はよく解らねえ！……………ん！？そういえばあのオッサン…何か言ってたな。たしか俺がイレギュラーだとか何とか」

ルフィが頭を傾けて思い出していると凧がルフィに聞いた。

「オッサンって誰よ？」

「英霊の座つてとこにいたオッサンだ！声しか聞こえなかったけどな！」

「つまりそのオッサン？によると、ルフィはイレギュラーなサーヴァントとして召喚されたってワケ？」

「ああ！よく分かんねえけどな！」

ルフィが笑って答えると凧が溜め息をつく。

「ハア…よりにもよって何でこんな馬鹿っぽそうなヤツがサーヴァントなのよ」「ム！バカってお前失敬だなー！俺はこれでも海賊王だぞー！！」

「ねえ、あんたの言うその海賊王って一体何なの？」

凧がそう言うと、ルフィは呆れた目で凧を見た。

「海賊王を知らねえってお前……………」

「な、何よ？」

「俺よりバカなんじゃねえのか?!」

その瞬間ルフィの頭に衝撃がはしった。

「痛てえええ!!何すんだよ!凜!」

「ルフィ、あんまり調子にのつてると死ぬわよ!!」凜は笑顔でルフィに言った。しかし目は笑っておらず、拳を震わせている。その様子を見た土郎は慌てて止めにはいった。

「と…遠坂、ここは一先ず落ち着こう!!な?」(ああ、俺の中の遠坂のイメージが崩れていく)

土郎がどこか寂しげな表情で凜を宥めていると今度はセイバーが聞いた。

「それで、海賊王というのはどのような王のですか?」

「いいか!海賊王っていうのはだな、海賊の中で一番強くてワンピースっていうひとつなぎの大秘宝を手に入れた奴のことだ」(ドリーン)

ルフィが胸を張って言うが、他の三人の頭には?マークが浮かんでいた。

「ねえセイバー、今の話の意味解る?」

「いえ、全く解りません。ワンピースという宝も聞いた事ありませんし」

「やっぱり嘘なんじゃないかしら？」

凜とセイバーがひそひそと話し合っていると、士郎がルフィを見ながら呟いた。「なあ、もしかしたらルフィは異世界から召喚されたんじゃないか？」

「「異世界！？」」

二人の声が重なる。

「ああ、ルフィは存在したいが規格外なサーヴァントな訳だから異世界から来たって言われても納得がいくだろ？！」

そう言われてしばらくすると二人共納得した表情になる。

「まあそうなるわね。魔力も無いんだったらほとんど受肉したようなものだし、ホントにあんた何でもありね」凜がルフィを見てこめかみに手を添える。

「ハア、なんだか頭痛くなってきたわ…」

「ん？なんだ頭痛てえのか？凜はバカなんだからあんまり考え込むなよ！」

凜の様子を見てルフィが笑顔で言うがまた頭を殴られる。

「アンタのせいよ！！それに私はバカじゃないっていつてるでしょ！いい加減にしないと怒るわよ！！」

「もう怒ってんじゃねえか！」

「うるさいっ!!」

凜とルフィがギャーギャー騒いでいる横では士郎がセイバーにお茶を出していた。

「セイバー、お茶でも飲むか？」

「はい、ありがとうございますシロウ」

士郎とセイバーがお茶を飲んでいるとルフィをボコボコにした凜が急に立ち上がり、

「さて、そろそろ行きましょうか衛宮君」

「? 行ってくて何処へ？」

「隣町にある言峰教会よ。ここから少し遠いけど、歩いて行ける距離よ」

「だから何で教会なんだよ？」
士郎が眉を寄せる。

「その教会のエセ神父がこの戦いの監督よ! そいつが聖杯戦争についてよく知っているわ、衛宮君も聖杯戦争の理由について知りたいでしょ？」

凜は笑みを浮かべながら言った。

「ああ、分かった。行くよ!」

「そう、じゃあさっさと行くわよ」

そう言うと凜は玄関へと向かった。それに続いて士郎とセイバーも居間を出る。玄関に向かう途中でセイバーがルフィに呼びかける。

「ルフィ！起きてください！！教会に行きますよ！」どうやらさっきのルフィと凜のやり取りを見て警戒を解いたようだ。セイバーに呼ばれるとルフィはムクリと起き上がった。

「ん？何だ？メシか？メシ食いに行くのか？！だったら俺は肉が食いてえなあ！！」

そう言うと三人の後を追って玄関に走って行った。

衛宮家を出た四人は夜の冬木を歩く。深夜1時過ぎ、外は闇に覆われて人影は皆無、時々犬の遠吠えが聞こえるぐらいで辺りは静寂に包まれていた。

グウウウウウ！！！！

そんな静かな夜に一人の腹の音が盛大に響いた。

「ちょっとルフィ！うるさいわよ！！」

凜が静かに怒鳴る。

「だって腹減ったんだからしょうがねえだろ！何だよ、メシ食いに行くのかと思えば教会かよ！教会行ってもメシなんか食べねえぞ」

ルフィがブーブー文句を言っていると、それを見兼ねた士郎が苦笑しながら言った。「そんなに拗ねるなよルフィ！帰ったらちゃんと作ってやるから」

「ホントか！！士郎はいい奴だな」

ルフィは晴れやかな笑顔になり、士郎の背中をバシバシ叩く。

「……………」

「どうしたのよセイバー？そんなに黙りこんで」

先程から黙りこんでいるセイバーに凜が話し掛けた。

「リン、どうして私はこの様な物を被らないといけないのですか！」「そう言うセイバーは鎧の上から黄色い雨合羽を被っていた。

「しょうがないだろ！セイバーその鎧脱がないって言うんだから。そんな鎧見たら街の人々も驚くだろう」

そう言うて士郎はセイバーに言い聞かせる。

「ッッ」

悔しそうにするセイバーの肩にルフィが手を置く。

「まあいいじゃねえかセイバー！雨合羽カッコイイし！ほら、俺の
もいいだろ」

シシツと笑っているルフィもセイバーと同じ雨合羽を着ている。

そんな話をしていると四人は川が近くにある公園に辿り着いた。公園の先には新都まで続く大きな橋がみえる。

「ウワーー！でっけえ橋だな！！」

ルフィが橋を見て声を弾ませていると、

「ん？」

公園にある電灯の下に何かを見つけた。

「あー！！お前！！」

ルフィが叫んだ方向にはあのいなくなった黒猫がこちらを向いて座っていた。ルフィの声により他の三人も黒猫に気付く。

「ルフィ、どうしたんだ？ただの黒猫じゃないか」

「あいつは俺がこっちに來た時俺の帽子を持ってたんだ！」

ルフィが黒猫を見つめながら士郎の質問に答えた。

「！」

ここでセイバーがあることに気付く。

「シロウ！リン！あの黒猫の額をよく見てください」そう言われて
士郎と凧は黒猫の額を見る。

「あれは……」

「令呪！！」

黒猫を見た二人は同時に叫んだ。黒猫の額には三つの聖痕、令呪が
刻まれていたのだ。そして士郎と凧が叫んだ瞬間に黒猫は何処かへ
走り出した。

「あ！！待てよコノヤロウ！！」

黒猫が走りだした瞬間にルフィも黒猫を追い掛けて走り出す。

「待ちなさい！ルフィ！」凧が呼び止めるもルフィは黒猫を追って
走り去って行った！

「まったく！あのバカ！」

凧が少し腹を立てていると士郎がルフィが走り去って行った方向を
見て呟いた。

「なあ、セイバー！あの猫令呪があるって事は……」

「はい！ルフィの帽子を持っていて、令呪があるという事は、間違
いなくルフィのマスターでしょう！！」

それを聞いた士郎は呆然となり、凧は顔をしかめて盛大にため息を

大きくつく。

「ハアア……猫がマスターなんて聞いた事ないわよ！どこまでふざけてんのかしらアイツ！！！」そう言つと橋に向かって歩き出す。

「ほら、さつさと行くわよ二人共！！アイツならすぐに追って来るでしょ」

凜に言われて二人も教会に向かって歩き出した。

第4話 規格外なヤツ（後書き）

ルフィに魔力はあんまり似合わないなあーと思ったのでこんな設定になっちゃいました。

第5話 白い少女と巨人（前書き）

けっこつ長めに書きました！これからも頑張ります！

第5話 白い少女と巨人

冬木市にある住宅街の坂を二つの影が白い吐息を吐きながら登っていた。しかしそのスピードは一般の人間ではとても追い付けないくらい早い。

「ハア…ハア…結構速いなあいつ」

そう言うのは二つの影のうち後ろを走っている方の影であるモンキ・D・ルフィである。ルフィは今、額に令呪を持つ謎の黒猫を追っている最中であつた。

「おい！！待てよ、お前！！あ！？士郎達置いて来ちまつた！！まあ、来た道もどればいいか！道覚えてねえけど大丈夫だろ」

そう言うルフィは黒猫を長い時間追い回しているのだろう、鼻の頭が赤くなっている。着ていた雨合羽もすでない。するとルフィの十数メートル先を走っていた黒猫は交差点を右に急カーブした、ルフィもそれを追うように右に曲がろうと交差点の手前を走った。そしてルフィが右に曲がろうとした瞬間、

「キャッ！」

と言う声があった。ルフィが交差点を右に曲がると、声があった所には雪のような肌と髪を持つ少女が尻餅をついていた。少女の傍らには紫の帽子が落ちている。

「おい！！大丈夫か！？」

ルフィは急いで少女に駆け寄る。少女はルフィに気付くと人がいたのかと一瞬驚いたような顔をするがすぐにルフィに微笑んだ。

「うん！大丈夫だよ、お兄さん。私強いから！」ルフィは少女がいる前で腰を落とし少女に視線を合わせるとニカッと笑った。

「そうか！ゴメンな、猫が通っただろ？あの猫俺のなんだ」

そう言うとルフィは笑って少女の頭を優しく数回撫で、落ちていた帽子の埃を落として少女の頭に被せた。

「お兄さん、猫を探してたの？」

「ああ！何処にいったか分かるか？」

「うん！その猫ならあっちにいるよ」

少女の指差す方向には、黒猫が座って大きなあくびをしていた。

「あー！いやがったな、アノヤロウ！」

ルフィは猫を追いかけようと立ち上がった。そして少女の顔を見てもう一度笑った。

「ありがとなー！！」「うん！頑張つてね、お兄さん！」

少女もルフィに笑い返すとルフィはまた猫を追い掛けて走って行っ

た。

ルフィが居なくなると少女が独り言のように呟いた。

「あんなに明るい人、初めて見たわ」（でも…頭を撫でられたの久しぶりだな）

そう言つてルフィに撫でられた箇所を自分で撫でた。

ルフィは少女と別れた後、洋館が立ち並ぶ住宅街を走っていた。猫との差は一向に縮まらない。

「ハア…やべえ！腹減った…！」
グウウウウ！

ルフィの腹になる。すると前を走っていた黒猫が急に歩き出した。ルフィはこのチャンスを逃さんとばかりに黒猫に飛び掛かった。

「ウオオオオオー！！」ルフィは見事に黒猫をキャッチして道路を転がった。

「やっと捕まえたぞ！！おいお前、なんで逃げるんだよ！！」

ルフィが黒猫を顔の近くまで持ち上げて話し掛けていると、後ろから声を掛けられた。

「あなたはこんな時間に何をしているんですか?!」

ルフィが後ろを振り向くと、そこには女性が立っていた。

「ん？俺はこの猫を追っかけていただけだぞ！」

猫を持ち上げてルフィは言った。それを見て女性はため息をつく。

「ハア…あなた、この街が今どれ程危険か分かっているんですか？殺人事件まで起こっているのですよ」

「シシッ！心配すんな！！俺は強いからな！！」女性の言葉にルフィは笑顔で返す。しかしこれは女性にとっては逆効果だったようで、さらにルフィを睨みつけた。

「いいから早く自分の家に帰りなさい！」

「うん、分かった」

女性が声をきつくして言うと、ルフィも腹が減っていたためか素直に従った。ルフィが猫を抱いて帰って行くと、女性もまたルフィとは逆方向に歩き出した。

ルフィが猫を追いつけ回している頃、士郎達三人は言峰教会に着いていた。セイバーは外で待機しており士郎と凜は中で言峰の話の聞いている。そこで士郎は十年前の火災は前回の聖杯戦争によって引き起こされた事を知り、マスターとして戦う事を決意する。「俺はマスターとして戦う。十年前のような出来事を二度も起こさせる訳にはいかない」

士郎の言葉に言峰は満足そうに笑みを浮かべる。

「それでは君をセイバーのマスターとして認めよう。この瞬間に今回の聖杯戦争は受理された。各マスターは聖杯を求め、マスターが残り一人になるまで戦い続ける」

言峰が宣言する。士郎はこの瞬間、絶対に負けないと心に決めたのだった。

「終わったようね。それじゃ、私も帰る前に一つだけ質問していい綺礼？」

タイミングを見計らったように凜が言峰に尋ねる。

「かまわんよ。大抵の疑問には答えよう」

言峰が答えると凜が小さく笑みを浮かべて言った。

「それじゃ遠慮なく。綺礼、あんた今回の聖杯戦争に八体目のサーヴァントが召喚されたの知ってる？」

「!!!!?なんだと!?!」

凜の質問にさすがの言峰も驚いて目を見開いていた。この様子を凜は面白がって見ている。

「フフ、さすがの綺礼も知らなかったようね。少し残念だけど、面白いものが見れたからまあいいわ」

そう言って凜は士郎と一緒に教会を立ち去ろうとする。すると、扉の前で言峰に呼び止められた。

「待て、凜！そのサーヴァントは何と名乗っていた？」

「たしか…海賊…王とか言っていたわね！」

言峰の問いに凜は思い出しながら答えると言峰は「……フム」と考え込み、やがて話し出した。

「……これはあまり知られていない事だが、第一回の聖杯戦争において海賊王と名乗るサーヴァントが現れたそうだ」

「「え！……!?」」

今度は凜と士郎が驚かされる番となった。

「ちょっと!!それどういう事よ?!」

凜が声を荒げて言峰に尋ねる。しかし、言峰も肩を竦めるだけであつた。

「私にもそれしか分かん。第一回聖杯戦争は二百年も前の事で当

時は教会も監督の立場ではなかった。だから詳しい記録は一切残っていない」

言峰の答えを聞き凜はガツクリと肩を落とす。

「まあいいわ、それじゃあね綺礼」そう言つて凜は扉の向こうに消えた。

士郎も凜の後に続いて出ようとすると言峰が士郎に向かって言った。

「…喜べ少年。君の願いは、ようやく叶う」

士郎はハッと後ろを振り向いた。

「なにを、いきなり」

「判っていたはずだ。明確な悪がいなければ君の望みは叶わない。例えそれが君にとって容認しがたいモノであろうと、正義の味方には倒すべき悪が必要だ」

その時、士郎は目の前が真っ暗になりそうであった。自分は正義の味方になりたいという望みは、同時に何かを犯そうとする悪を望む事に他ならないという事に気付かされたのだ。

「―おま、え」士郎は言峰を睨みつける。そんな事望むはずがない、望んだ覚えはないと。

しかし言峰は士郎の胸を刺すように言う。

「敵が出来てよかったな」

士郎が奥歯を噛み締めていると言峰が続けて言った。

「なに、取り繕う事はない。君の葛藤は、人間としてとても正しい」
「っ——」

士郎は言峰の言葉を振り払うように教会の外に出る。

士郎が外に出ると凜と雨合羽を着たセイバーが待っていた。士郎は凜とセイバーを見ると緊張が解けたのか少し表情が穏やかになった。

士郎が凜とセイバーの元までたどり着くと、凜が口を開いた。

「それじゃあ行きましょう。途中まで帰り道一緒でしょ、わたしたち」そう言って歩き出すと士郎とセイバーもそれに続いた。しばらく三人で歩いているとセイバーが凜に尋ねた。

「リン、先程の話は本当なのでしょうか？」

セイバーがルフィの事について話していると士郎はすぐに理解した。

「ええ、あれ程驚いている綺礼は初めて見たからたぶん本当よ」

凜は深刻な顔で頷く。

「その事については、まだ調べてみないと詳しいことは解らないわね……」

凜がブツブツ独り言を言っていると士郎がある事に気付いた。

「そういえばルフィ、何処行っただ？」

「あいつの事だからもう家に帰って寝てるんじゃない」

「ありえますね」

「ありえるな」凜の返答にセイバーと士郎も納得すると「プッ…」三人は同時に小さく笑いだした。

そんな雰囲気ですべて帰っているとやがて交差点に付いた。

「ここでお別れね。明日からは敵同士よ」

凜は今までとは違う厳しい視線を士郎に向けた。士郎もそれを察したかのように小さく頷く。凜はそれに満足したのか自分の家の方向に歩き出した。

「それじゃあね、衛宮く……！」

しかし、数歩歩いたところで彼女の足がピタリと止まった。

「？と、遠坂？」

士郎が不思議がって凜に話し掛けた瞬間、幼い声が聞こえてきた。

「ねえ、お話は終わり？」声のした方向を見ると、数十メートルある坂の上に少女とソレは立っていた。

ソレというのは二メートルを軽々と越える巨体、体は鋼の筋肉纏い、そしてその場にいるもの全てを破壊するような狂気を放っている。その姿はまさしく、

「……………バーサーカー」

凜が小さく呟く。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

微笑みながら少女は士郎に話し掛ける。

だが、士郎は完全に身動きがとれなくなっていた。

「フフッ」

その様子に満足したのか少女はさらに微笑みを浮かべ、今度は凜に話し掛けた。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォーン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「……アインツベルン……」

凜の体がかすかに揺れた。

少女は一度だけセイバーを見て、

「あら？リンのサーヴァントは何処なの？二人一緒に潰してあげようと思ってたのに」

少しだけ残念がると、戦いの合図を言い放った。

「じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

それと同時に巨体が飛ぶ。何十メートルもある坂を一息で落下してくる。

「……シロウ、下がって……！」

セイバーは雨合羽を脱ぎ捨て剣を構えバーサーカーを迎え撃つ。バーサーカーの大剣を、セイバーの不可視の剣が受け止める！

ガキイイイイン！！！！もの凄い衝撃音が辺りに響き渡った。

「クッ」

バーサーカーの大剣をセイバーは正面から受け止めた。

キン、カキン、ギン

それから数回金属音が響く、バーサーカーの攻撃をセイバーは見事に防いでいる。バーサーカーの攻撃は一撃で民家を全壊させる程の威力を持つている。本来この怪物と打ち合いを演じるのは不可能に近い事なのだが、この小柄な少女は己の技能、直感、魔力放出で見事な打ち合いを演じていた。しかし、そんなセイバーもバーサーカーのパワーに押され、反撃できずにどんどん後退していく。そしてバーサーカーの横からの一撃を防いだ時、セイバーの体がよろめいた。

「しまった……！」

セイバーが思わず叫ぶ。

しかし、バーサーカーは旋風を巻き起こしながら強く踏み込んで大剣を下から上に振り抜いた。「キイイイイン」大剣はコンクリートをえぐりセイバーを下から斬ろうとするが、セイバーは何とか剣で防いだ。しかし、踏み込みが足らなかったのかセイバーの体は上空に大きく吹き飛ぶ。

セイバーは空中で受け身を取り着地しようとするが、着地点にはバーサーカーが待ち構えていた。

「■■■■■■！！！」

唸り声を上げて大剣を薙ぎ払う。

「ハアアア！」セイバーも剣で受けきろうとするが、全てを受けることが出来ず脇腹を斬られ、そのまま横に吹っ飛んだ。凜もガントをうつて応戦しようとするが全く効いていない。

「無駄よリン、勝てるわけじゃない。私のバーサーカーはね、ギリシャ最大の英雄なんだから」

「……！？ギリシャ最大の英雄って、まさか！！？」「そうよ。そこにいるのは大英雄ヘラクレス。あなた達程度が使役できる英雄とは格が違うのよ」

イリヤが自慢げに話す。イリヤが話している間も、バーサーカーがセイバーに一步ずつ近付いていく。

セイバーは体の至る所から血を流して重傷である。特にさつき斬られた脇腹とランサーにつけられた傷が完全に開いており、血がじわじわと滲み出ている。

「……………う、っ」

小さく呻くがそれでもまだ闘おうとセイバーは立ち上がり剣を構える。しかしその腕に力は残っておらず構えるだけで精一杯であった。

ズシャツ、セイバーの前でバーサーカーが立ち止まる。士郎がどうすればよいか迷っている時にイリヤがバーサーカーに告げた。

「いいわよバーサーカー。そいつ、再生するから早く殺して」

バーサーカーが大剣を振り上げる。そしてセイバーを斬ろうとした瞬間、士郎が動いた！

「……のおおお……！」

士郎は全力で翔けてセイバーを突き飛ばした。が……

「……………え？」

セイバーを突き飛ばした士郎はバーサーカーに腹を真っ二つに斬られた。

その場にいた全員が驚愕する。

「……………なんで？」

イリヤがぼんやりと呟く。

「あんた何してんのよ……！馬鹿……！」

凜が士郎に駆け寄る。

「……………シロウ……………」セイバーも呆然と士郎を見ていた。

イリヤは固まっていたがしばらくして、

「もういい。こんなの……つまんない」

不機嫌な顔で言った。

「リン、次に会ったら殺すから」

バーサーカーを殴って吹っ飛ばした！

「……早い!?」

セイバーが傷を押さえながら驚く。

しかし、バーサーカーも持ちこたえて倒れない。

「嘘……効いてないの!？」

「……いえ……違います!」凜が叫ぶと、セイバーがそれを否定した。

「見てください!!!バーサーカーの体を!」

「……!」

バーサーカーの体を見るとルフィの拳の跡がくつきりと残っていた。

「ダメージは残っているはずです」

セイバーはハッキリと断言する。

そして、次のルフィのした攻撃に全員が目を丸くするのだった。

「ゴムゴムのおお!!」

そう言ってルフィは片腕を後ろに大きく伸ばした。

「……!」

「う、腕が……伸びた……!？」

凧が信じられないといったような表情になる。セイバーとイリヤも凧と同じ反応を示す。

「ピストル——！！！！」三人が驚きを隠せないなか、ルフィはゴムの反動を利用してバーサーカーを殴った！

ドゴオオオオン！！！！

轟音と共にバーサーカーは吹っ飛んだが……

「ウワツ——！！」

バーサーカーは殴られた瞬間ルフィの腕を掴み、腕を捕まれたルフィはバーサーカーの方へ引き寄せられるように吹っ飛んでいった。

ズドオオオオ！！

辺りに土煙が広がる。

「「ルフィ——！！」」

セイバーと凧が同時に叫ぶ。やがて土煙がなくなり、中からルフィとバーサーカーが現れる。

「ウオオオオ——！！」ルフィはバーサーカーの体にしがみついていた。

「ゴムゴムのおおお」

今度は首を後ろにのばす。

「カネ——！！！！」ルフィの頭突きがバーサーカーの顔面に炸裂する！

「■■■■■■！！」

しかし、バーサーカーも痛みを堪えてルフィの頭を片手で掴み自分から引きはがし、そのまま地面に叩きつけた。

ドオオオオン

コンクリートが割れる。

バーサーカーはルフィの頭を持ったまま高い位置まで腕をもっていき、大剣を持つ手を構える。

「危ない！！！」

危険を察知したセイバーがルフィの元に高速で駆け寄る。

キイイイン！！！！

セイバーはルフィとバーサーカーの間に割り込み、なんとか大剣を防いだ。

「離せ、コンニャロ！！」ルフィが掴まれている腕を殴った。腕から開放されると、セイバーと一緒に一旦後ろに引いてバーサーカーから距離をとった。

「ありがとな、セイバー！」

セイバーにニツと笑いかける。

「お礼は勝負が着いてからお願いします」

セイバーがバーサーカーを睨みつけながら言葉を返すとその言葉にルフィも真剣な表情に戻り、バーサーカーを睨む。ルフィ達とバーサーカーの間は距離にして十メートル前後、次の激突で勝敗が決まると凜は直感で理解する。

「ヒュウウ」と戦場に一陣の風が吹いた。それを合図にルフィは両手を後ろに伸ばし、セイバーとバーサーカーもそれぞれの武器を構える。

そして同時に飛び出した。しかしその時、凜の頭にはアーチャーの声が響いていた。

「——え、アーチャー……？ 離れろってどういう事……？」

凜がアーチャーに聞き返そうとするが三人の声に阻まれる。

「ゴムゴムのおお……！！！」

「ハアアアアア……！！！」

「■■■■■■■■……！！！！！」

三人が掛け声をあげた瞬間、数百メートル離れた所で赤い外套の騎士は素早く弓を構え、呪文のような言葉を唱えた。

「I am the bone of my sword」

アーチャーが咏唱すると、アーチャーの手にはいつの間にか矢が握られていた。

「カラドボルグ（偽・螺旋 剣）」

そう言うアーチャーは矢を放った。放たれた矢は唸りを上げてルフィ達の方へ飛んでいく。

「バズーカアアア!!!」

セイバーと一緒に飛び出したルフィが声と共に両手をバーサーカーに突き出そうとした瞬間、アーチャーの放った矢がバーサーカーを射抜いた。

ズガアアアアアアン!!!!!!!!!!!!

凄まじい衝撃と爆発音がその周囲を包み込む。衝撃で弾き飛ばされた様々な破片が四方に跳ね飛ばされ、大気は振動し、辺りは一瞬にして火の海と化した。

アーチャーの放った矢は矢というよりミサイルと言ったほうが正しい威力を秘めていたのだ。

爆心地であつたろう地面はえぐれ、クレーター状に陥没している。しかし…それほどの破壊を以ってしても、黒い巨人バーサーカーは健在であつた。燃え盛る炎の中でバーサーカーはアーチャーのいる方向を睨みながら立っている。

「……ふうん。見直したわリン。やるじゃない、あなたのアーチャー」

何処からか楽しげなイリヤの声が響く。

「もういいわ、戻りなさいバーサーカー。今日は充分楽しんだですよ？」

「……………」

巨大な影が揺らぐ。

炎の中、バーサーカーはイリヤの声に応えるかのように後退しだした。

「——なによ。ここまでやって逃げる気？」

「ええ、気が変わったの。セイバーはいらないけど、あなたのアーチャーとあの麦藁のお兄さんには興味が湧いたわ。だから、もうしばらく生かしておいてあげる。それに、……早く治療しないとそのお兄ちゃんが助からないでしょ？」

「——ッ!—」

イリヤに言われて凜は士郎を抱えていた腕に力がこもる。

炎の勢いが少し弱まり、やがて巨人の姿は消えた。

「それじゃあバイバイ。お兄ちゃんと麦藁のお兄さんが生きてたら伝えといて、また遊ぼうねって」

イリヤも言い終えると、炎の向こう側へ消えていった。

イリヤ達が姿を消すと凜は士郎に呼びかけた。

「衛宮君！！衛宮君しっかりして！！！」

士郎は凜の腕の中でグッタリとしている。

「死んだりなんかしたら許さないからね！！」怒りと悲しみの混じった声で凜は士郎に呼びかけ、傷の具合を見ようと士郎のシャツを捲った。

「……え？！………傷が…浅くなってる？！！」

士郎の傷を見た凜は驚愕した。バーサーカーによってつけられた傷は再生し、少しずつ塞がってきてたのだ。

「なんで……？衛宮君は素人で治癒の魔術なんか……」
凜が疑問を言いかけた瞬間、

「凜！！士郎は！！！！士郎は大丈夫なのか！！？」

後ろから大声で呼ばれた。凜が後ろを振り向くと、セイバーを両手に抱えたルフィが立っていた。

セイバーもルフィに抱えられたまま不安そうな表情をして凜を見ていた。

「リン、シロウは大丈夫なんでしょうか？」

「ルフィ！声が大きい！衛宮君は大丈夫よ、セイバー。何故だかまだ解らないけど、体が再生してきているから包帯巻いて布団に寝かせておけば勝手に回復するでしょ」

凜はルフィを叱ると、セイバーに容態を説明した。

「それは良かった！」

セイバーはホツと胸を撫で下ろすと、いつもの表情に戻りルフィを見上げる。

「ルフィ、窮地を救ってもらったのは感謝します。ですが、そろそろ降ろしてもらえませんか」

淡々とした声でルフィに言った。

「ああ、そうだったな！」

ルフィも士郎が無事で安心したのか、気の抜けた笑顔になりセイバーを地面に降ろした。

「それにしてもよく爆発に巻き込まれなかったわね」「はい！私は気付かなかったのですが急にルフィに引っ張られて助かりました」

「俺もよく解んねえけど体が勝手に動いてた」

「フフ、きつと野生の勘ってやつね」

凜は小さく笑うとルフィとセイバーに言った。

「さて！気になる事はたくさんあるけど、とりあえず逃げるわよ。
これだけハデにやったんだから、騒ぎを聞き付けて人が来るわ！ル
フィ、衛宮君を背負って」

「わかった！おい、お前も行くぞ！」

ルフィは黒猫に呼びかけ、士郎を背負うと走り出した。それに続いて凜とセイバーも走り出す。

そして、冬木市に消防車のサイレンが鳴り響く中、三人と一匹の影は闇に紛れて見えなくなった。

第6話 凜との同盟（前書き）

大変遅くなりました。すみません！よろしくお願いします！！

第6話 凜との同盟

——見た事もない景色だった。

見えるのは空、…そして海。

空と海が果てしなく続いている。目の前に広がる景色は青一色。もはや水平線がどこにあるのかも解らない。

そんな中を一隻の船が進む。船からは陽気な声と笑い声が聞こえる。

その船はゆっくりと真っ直ぐ進む、どんな事があるかと道を踏み外さない。

例えどんな困難な状況になろうとも、彼らが絶望する事はなくひたすら前を見て真っ直ぐ進んだ。

——そして水平線に向かって進むその船の帆には髑髏と麦藁帽子が描かれていた。

「……………ん」

士郎は小さく呻き、瞼をあげた。

「……………今の、夢」ぼんやりした意識の中で、見ていた夢を思い起こす。

（…あれは……………海賊船？何で俺……………あんな夢を…）

しばらく考えていると口の中で鉄の味がすることに気付き、うがいをするために洗面所に向かう。

洗面所でうがいをすると水の中に血が混じっていた。顔を洗い、汗ばんだ体を拭こうとすると腹には包帯が巻かれているのに気付く。

（何で包帯？）

不思議に思いながらも士郎は居間へと向かう。

そして、居間に入るとそこには当たり前の様に凜が座っていた。

「おはよう。勝手にあがらせてもらってるわ、衛宮くん」

「ああ、おはよう遠坂」あいさつを返し台所へ歩く。しかし、途中で立ち止まり、

「…なんか違和感あるな……………って遠坂、おまえどうして」

「待った。その前に謝ってくれない？ 昨夜の一件についての謝罪を聞かないと落ち着けないわ」

士郎が驚いて凜に聞こうとすると、怒りの表情で謝罪を要求された。

「昨夜の一件って……………ハッ！」

士郎はここでようやく深夜あった事を思い出した。

（確か俺はセイバーを助けようとしてバーサーカーに斬られ……）

「…………ヘンだ。なんで生きてるんだ、俺」

「思い出した？ 自分がどれほど馬鹿な行動をしたかって。なら少しは反省しなさい」凜はまだ怒りがおさまらないのか、フン、と鼻を鳴らしている。

「いや、違うんだ！ あの時はもっと上手くやるつもりだったんだ！」

「バーサーカー相手に上手も下手も関係ないわよ！！ マスターが死んだらサーヴァントは消えるって言ったでしょう？ だっていうのにサーヴァントを庇うなんてどうかしてるわ」

士郎が反論しようとするさとさらに非難され、さすがの士郎もウツ…となる。

「…………でもどうして遠坂が怒るんだよ。俺がヘマやらかしたのは遠坂には関係ないだろ」

士郎がふとした疑問を口にすると、

「関係あるわよ、このまま起きないんじゃないかって心配したんだから!!」凜が声を荒げて言う。

そして士郎も凜を心配させたことを知り素直に謝った。

「そうか。ゴメン遠坂、心配させてしまって」

「フン、分かればいいのよ。これに懲りたら、次はもっと頭のいい行動をしてよね!」

士郎に謝ってもらい凜も少し機嫌を直す。

それから一息して、士郎は凜にお茶を出しながら喋りかける。

「なあ、話を戻すようだけど俺はどうしてバーサーカーにあればどの傷をつけられたのに生きているんだ?」

確かにあの時の傷は普通の人間ならば即死は免れない。しかしこの衛宮士郎という人間は生き残ったという事実を士郎本人は未だに信じられないでいた。

「その事なんだけどね、私はあなたと契約しているセイバーに関係があるんじゃないかと思うの」

「?...セイバーに?」

凜がお茶を飲みながら答えると士郎は首をかしげた。

「ええ、見たところセイバーには自然治癒の能力があるみたいだし
ソレが士郎の体に流動した可能性が高いわ」

「なるほど……」

士郎は顎に手をあてて納得すると、ある事に気付く。

「ん？………遠坂！今俺の事名前で呼ばなかったか？！」

「え？ああ、そういえばそうね。でもそれがどうかした？」

「あ……いや、どうもしないんだけど……」

士郎が少し戸惑いながら言うつと凜は顔をニヤリとする。

「何？士郎は女の子に名前と呼ばれるのが恥ずかしいの？」

「ち…違う！違うぞ！！少し驚いただけだ！！」

士郎があたふたしながら精一杯否定する。

「ふーん、まあそういう事にしといてあげるわ」

凜はニヤリとした顔のままお茶を一口飲むと、真剣な顔に戻り言った。

「さて、そろそろ本題に入ろうかしら。あ！その前に士郎、ルフィとセイバーを呼んできてくれない」

「！！！！そうだ！あの二人どこにいるんだ」

士郎は凜に言われて初めて二人がいない事に気付いた。

「二人ならたぶん道場にいるだろうから早く呼んできて。貴方達三人に話しておきたい事があるから」

凜がそう言つと、士郎は慌てて道場に向かった。

道場は静寂に包まれていた。外からは鳥の鳴き声が聞こえ、窓から入る爽やかな木漏れ日が床板に反射し白く光り、普段は冷たい空間も今は温かさに満ちている。そんな中に、彼女はただ自然にそこに座っていた。

「――」

セイバーは眼を閉じており凜と正された姿勢からは、わずかな乱れも感じられない。彼女がただそこに座っているだけで彼女の周りにはピンと張りつめている。

士郎はそれをまるで聖なるものを見つめるかのように眺め、掛ける言葉を忘れて戸口に立っていた。しかしそんな幻想も一人の男によ

って破られる。

グウウウウウー!!!

どこからか腹の鳴る音が聞こえる。

「ぐう——」

続いて盛大なイビキが、

グウウウウウー!!!「ぐう——」

そして今度は二つ同時になり、道場の静けさを一気に消しさる。もうどちらがイビキかも解らない。

士郎が音のする方へ目をやるとそこには何処から持ってきたのか布団が敷かれており、ルフィが大の字になって寝ていた。ルフィの上にあったであろう掛け布団はルフィから五メートル離れた位置にあり、代わりにルフィの腹の上には黒猫が気持ち良さそうに寝そべっている。

「…………ハア」

セイバーは小さくため息をつくとゆっくりと目蓋を開けてルフィに目を向ける。

「ルフィ、起きて下さい」

「ぐーーーーー」

ルフィに呼び掛けるが全く起きる気配がない。

「ムッ」

少し怒ったような表情をすると、

「ルフィ！！起きて下さい！！！！」

さっきより声を張り上げて呼びかける。…が、

グウウウウウ

返事の代わりに腹の音が返って来た。

「ムムッ」

セイバーはルフィをキッと睨みつけるとルフィのそばまで歩み寄り、腰を下ろして、

「いい加減起きて下さい」

ルフィの体を揺さぶりながら声をかける。それでもルフィは起きず、

「…んーーーー」

煩わしそうにセイバーに背を向けた。これにはさすがのセイバーも

カチンときたのかルフィの体を強引に起こして肩をガクガク揺さぶる。

「ルフィ！……起きなさい！……！」

「……………ん？……………ん…？」

セイバーが叫ぶとルフィがゆっくりと目を開け、覚めきっていない意識の中でぼんやりとセイバーを見ると、

「……………はら」

（……………は！？）

あまりにも予想外の言葉に二人の思考は停止した。

「…腹……………減った、サンジ…飯作ってくれ…」

「ルフィ、寝ぼけてないで起きて…！」

「……………んあ？セイバーじゃねえか！…どうしたんだ？」

「どうしたんだじゃありません、一体どれだけ呼びかければ起きるのですか？」

「シシッ、昨日はちょっと疲れたからな！それより飯をつて…お！士郎じゃねえか…！」

ルフィは戸口に立っている士郎に気付くとニカッと笑う。

「ああ、おはよう！ルフィ、セイバーも」

「はい、おはようございますシロウ！目を覚ましましたのですね…良かった」（ニコッ）
（うつ／＼／）

士郎も笑顔で返すがセイバーが笑いかけると顔を赤くした。

「どうした士郎？顔が赤けえぞ？」

「な…なんでもない。それよりセイバー、一応確認を取って起きたいんだけどセイバーは俺のサーヴァントとして聖杯戦争に参加する。これでいいんだったよな？」

「はい！私は貴方のサーヴァントであり貴方の剣です！！」

「俺の…剣か…、でもこんな魔術師として半人前の俺でいいのか？」

「はい！確かにシロウは半人前ですが、それでも私には勝つ自信があるのだ」

「そっか、それじゃあヨロシクな！セイバー」

「こちらこそ」

士郎とセイバーが互いに握手するのをルフィは黙って嬉しそうに眺めていた。しかし、

「挨拶もいいですが、シロウ。昨夜の件についてあなたに言っておきたい事があります」

さつきまでの穏やかさが嘘みたいな不機嫌さでセイバーが口を開いた。

「はい？」

「ですから昨夜の事です。シロウは私のマスターでしょう。その貴方があのような行動をしては困る。戦闘は私の役目なのですからシロウは自分の役割に徹してください。自分から無駄死にされては、私でも守りようがない」

「な、なんだよそれ！あの時はああでもしないとセイバーが斬られてたじゃないか！」

「その時は私が死ぬだけでしょう。シロウが傷つく事はなかった。今後あのような行動をしないように。マスターである貴方が私を庇う必要はありませんし、そんな理由もないでしょう」

淡々と語るセイバーに対し、士郎の頭にはあの時血まみれになったセイバーの姿が浮かび上がり感情的になったのだろと思うわず叫んでいた。

「ば……バカ言っな、女の子を助けるのに理由なんているもんか！」

怒鳴られて驚いたのか、セイバーは意表を突かれたかのように固まったあと。まじまじとなんともいえないような表情で士郎を見つめる。士郎も自分がどれだけ恥ずかしい発言をしたのか理解したように少しずつ後退していった。

「と、とりあえずうちまで運んでくれたのは感謝してる」

ありがとな、と羞恥心からかそっぽを向きながらお礼を言う士郎にセイバーは少し微笑んでルフィを見た。

「士郎は礼儀正しいんですね。しかしそれはルフィに言っていただけじゃないと。貴方をここまで運んだのは彼ですから」

「そうなのか。ルフィ、ありがとな！」（あの時見た人影はやっぱりルフィだったんだな）

「おう！気にすんな！！」
グウウウウウウ！！

笑って応えるルフィだったが同時に腹が鳴ってしまいそれにつられて士郎とセイバーはクスツと笑みを浮かべた。

「よし、それじゃご飯にするか！」

「メシか？！！やったあーーーー！！！！！！」

「ああ、でもその前に遠坂から話があるみたいだから二人共に来てくれ」

士郎がそう言うと三人は居間に向かうため道場をあとにした。

「手を組む？」

士郎達三人は居間に着くと凜に同盟を組まないかと話しを持ち掛けられていた。現在四人はそれぞれ腰をおろし机を囲んでいる。

「ええ、手を組むっていうよりは協同戦線をはるって言った方が正しいかしら。あのバーサーカーを倒すまで休戦協定を結んでお互いに協力して確実に相手を倒すって算段よ」

「まあ理解はできるけど……」

「何でいきなり？って顔してるわね。理由は正直いつて簡単よ。昨夜見たバーサーカーが私の想像以上だったって事、ただそれだけよ。ギリシャ神話の大英雄ヘラクレスっていったらそこら辺のマイナーな英雄なんか一撃で消滅するんじゃないかしら。あの強さと知名度はおそらく歴代のサーヴァントの中でもトップクラスでしょうね。この怪物を相手にするには私のアーチャーだけではキツイだろうし、それはあなたとセイバーにも言える事よ。昨夜の結果を見れば分かるでしょ？」

凜が士郎にも分かるように話しているとセイバーがムツとした表情で反論した。

「リン！それは違います！！これは言い訳に聞こえるかもしれませんが、あの時私の状態が万全であったならば決してあの様な遅れを取る事はなかった」

「そうね、確かにあの時セイバーの状態が万全であったなら違った展開になってたかもしれない…。でも私が問題あると言いたいのにはセイバーの事じゃなくて士郎の事よ！士郎は魔術師としてはまだヒヨツ子なのに昨夜みたいな行動を取られたら今後命がいくつあっても足りないし、勝てる戦いも勝てなくなる。貴女もそう思わない？」

「そうですね、今の士郎ではきつと苦戦するでしょう！」

諭すようにセイバーに言い聞かせる凜に対し、セイバーも頷いて納得する。しかしそれを見ていた士郎は落ち込んだように膝をついていた。

（セイバー…そんなにはつきりと頷かなくてもいいじゃないか…）

ポンッ！

（……？）落ち込む士郎の肩に誰かが手を置く。士郎が顔を上げるとそこには笑いながら話しかけるルフィがいた。

「心配すんな！士郎は絶対強くなるからよ！！」

「ルフィ……」

感動したのか目に涙を浮かべる士郎。……が、

「ま、今の士郎は確かに弱っちいな！！」

ズドーーーーン！！！！楽しそうに笑うルフィだったが士郎はさらに落ち込んでいった。

そんなルフィ達を余所に凧はさらに話を進める。

「それでなんだけど、あなた達が私達と手を組んでくれたならば私はその間士郎に魔術を教えるわ。それなら士郎は今より強くなれるし、バーサーカーも確実に倒せる。あなた達にとっては一石二鳥じゃない。どう？手を組んでくれる気になったかしら？って士郎、ちゃんと話聞いてんの？」

「……ああ、ゴメン……ちょっと落ち込んでただけだから。遠坂と手を組むって事に俺は賛成だ、というかありがたい。セイバーはどうだ？」

やっと立ち直った士郎はセイバーの方を見るとセイバーもコクツと頷いてくれた。これは別にかまわないという意味だ。

「よし、それじゃあ決まりね！これからよろしく、士郎」

「ああ、こちらこそ」

満足げに笑って握手を求める凧に士郎も笑顔で握手を返した。

「ルフィ！あんたはどうなの？」

士郎達と話を終えた凧はルフィにも聞いてみると、

「俺もいいぞ！！というか俺達は昨日から仲間になったんだから今さら手を組むとか言わなくてもいいじゃねえか」

「そ、ありがとね。でも昨日の時点で手を組んだ覚えはないわよ」

「そうか？じゃあ何で敵の士郎にあんなにいろいろ教えてくれたん

だ？」

ルフィが疑問を述べると凧は顔を真っ赤にして否定した。

「あ、あれは借りを返しただけよ／＼セイバーを止めるために令呪を一個使って貰ったし、あのまま戦ってたら私が卑怯だと思われるじゃない！ただそれだけよ！！決して士郎のためとかそういうのじゃないんだから！！！」

「ふーん、そういうモンか？」

「そうよ！！！」

まだはつきりしない顔のルフィに凧は無理矢理納得させる。そして調度その時、朝ごはんの準備をしに台所へ行っていた士郎が戻って来た。

「どうしたんだ？そんなに騒いで」

「士郎聞いてくれよ、凧の奴が「余計な事言うんじゃないわよ！！」

！」スミマセンでした！」

「？」

士郎は不思議に思いながら台所に戻って行くと、凧はどこか疲れた様子でとりあえずルフィの頭を一発殴った。

「イデッ！！痛いな何すんだよ！」

「あんたが余計なことするからでしょ！！セイバーもコイツに何か言ってるよって……何やってんの？セイバー？」

凧が同意を求めるようにセイバーの方を向くと、セイバーはルフィのマスターである黒猫を抱き上げて睨めっこをしていた。しかしセイバーが黒猫に向けるその視線は敵意というよりも、むしろ目を輝

かせている。

「な…なかなかカワイイですね／＼」

そんなセイバーを凜とルフィはしばらくぼーっと見ていたがしばらくして凜がセイバーに問い掛けた。

「セイバー、その猫がカワイイのは分かったからそいつが一体何なのかかったの？」

「いえ、カワイイという以外まったく解りません」

「え！……解らないの？」

「はい！魔力を感じるようで感じない。何と言うか、不思議な感覚ですね」

首を縦に振るセイバーに凜はまたもや疲れた表情を見せる。

「じゃあその猫については保留って事で。今はこの猫が他のマスターにバレない様にその令呪を隠しておいた方がいいわね」

そう言う凜はおもむろに手をポケットに突っ込むと中から少し大きめの絆創膏を取り出し、それを黒猫の額に貼りつけた。

「これで良しっ！後はそうね、ルフィ、この猫に名前でもつけてあげたら」

「ん！名前か！？そうだな、どんな名前がいいかな」

「ぜひカワイイ名前をお願いします!!」

ルフィが首を傾げて悩んでいるとセイバーが期待を込めてお願いする。

「ヨシッ! 決めた!!」

そう言うところルフィは黒猫を指差して言い放った。

「お前の名前は『肉』だ!!!」

「却下」

即座にセイバーと凧が切り捨てる。

「ルフィ!!! いくら何でも今自分が一番食べたい物の名前を動物に付けるのは間違っています!!!」

セイバーが強い口調で叱るとルフィも口を尖らせた。

「え〜いいじゃんか! うまそうで!!!」

「ダメです!」

「じゃあセイバーと凧はどんな名前がいいんだ?」

ルフィが二人に問い掛けると、先に凧が答えた。

「私は変な名前でなければ何でもいいんだけど。まあ黒いから『ク

口』とかでいいんじゃないかしら」

「普通だな」

「普通ですね」

「何よ、そのつまんなさそうな顔は!!!」

「つままないな」

「つままないですね」

「いいじゃない別につまなくて！！セイバー、そこまで言うのなら何かいい名前でも思い付いたんでしょね」

「はい、もちろんです」

凜が挑発するようにセイバーに詰めよるとセイバーは誇らしげな顔で胸に手を当てた。

「この子の名前は『ニケ』と命名します。その名前の意味は勝利の女神。まさに、この聖杯戦争のマスターにぴったりの名前です」

セイバーがそう言うのと黒猫も満足したのかセイバーに擦り寄ってきた。するとセイバー勝ち誇った笑みを浮かべてルフィと凜を見た。

「フツ、これで決定ですね。あなた達もこの名前と呼ぶように」

「うん！そっちの名前の方が何かカッコイイからな」

「なんか敗北感を感じるんだけど私もその名前がいいと思うわ」

ルフィと凜が負けを認めセイバーがうれしそうに『ニケ』と命名された猫を撫でていると料理を作り終えた士郎が戻ってきた。

「どうしたんだセイバー、なんだか嬉しそうだな？」

「シロウ、この子の名前は『ニケ』です。私が命名しました」

誇らしげに言うセイバーだったが、この名前を聞いた士郎は気まずそうな顔を見ると、

「セイバー、その『ニケ』ってのはもしかして勝利の女神からとったのか？」

「はい、さすがシロウですね！その通りです！！ですけど何か？」

「セイバー……あのな…非常に言いにくいんだが……その猫は“

オス”だ!”

「え……………」

その場の空気が凍る、そして次の瞬間には

「プツ…………ギャハハハハハ!!」

ルフィと凧の大爆笑が居間に響いた。

「ちよつ二人共笑い過ぎ!!大丈夫だよセイバー、ペットの名前に性別は関係ないからって…………あれっセイバー？」

士郎がセイバーの方を見てセイバーは顔全体を真っ赤に染め、俯きながらワナワナと震えていた。そこでやっと笑いが止まった凧もセイバーを宥める。

「そうよセイバー、士郎の言う通り性別なんて関係ないわ。それにその名前も似合ってるわよ」

「“オス”だけどな」

「あんたは余計なコト言わないの！」

凧がルフィの頭を叩いているとセイバーは顔を上げ、三人に笑いかけた。

「あなた達三人には後で話があるので道場まで来て下さい」

「あれ?なんで俺「何か言いましたか?シロウ」いえ、何でもありません」

セイバーの冷酷な笑顔に三人は一言も喋ることはできず、固まったままでその中をニケは気持ち良さそうに毛繕いをしている。

「シロウ、お腹が空きました。ご飯をお願いします」

「わ、わかった」

「あ、あたしも手伝う」

慌てて凜と士郎は台所へ逃げ込み、居間にはルフィだけが取り残された。

「セ、セイバーなんか怖いぞ」

冷や汗をダラダラ流しながらセイバーに話し掛けるルフィ。

「私はいつも通りですよ。それよりルフィ、貴方先ほど一番笑ってらっしゃいましたね」

「えゝ！！！」

「貴方には一番キツイお灸をしてあげますね」

この時ルフィは顔を蒼白にして運ばれてきた料理を見ても何も言わなかったという。

ルフィ達が恐怖の食事をしている時、その屋根の上では数里先をも見渡せる眼を持つ男アーチャーは深刻な顔で見張りをしていた。

（ハア…凜よ、何故あんな半人前の男と手を組む。それにあの麦藁の男…私が“アレ”であつた時にはいなかったはず。どういう事だ？）

「今回のこの聖杯戦争、何かが起こるかもしれない」

眉間に皺を寄せて呟いたアーチャーの独り言は眼前に広がる冬木の町並みに溶け込むように消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7129h/>

海賊のサーヴァント

2011年10月9日18時25分発行